**葛城王朝は実在した**

1. **葛城王朝とは**

神武1・綏靖2．安寧3・懿徳4・孝昭5・孝安６・孝霊７・孝元８・開架９の9代

**２．活動の本拠地と勢力圏**

　　孝昭５までは畝傍山から金剛葛城の東麓

７～9代で王寺から奈良中心部　勢力範囲は大和平野全域、河内平野も制圧。

山城、丹波、吉備も勢力圏に入れていた。

**3．葛城王朝の存在時期**

日本書記で神武即位の地と記されている御所市の本馬山付近で弥生後期の遺物が掘り出されていることから3世紀中頃に王都が設定されたものと考えられる。

孝元８と開化９は前方後円墳。孝元に先行する天皇は円墳。葛城王朝を倒して三輪山麓に王都を作った崇神10、垂仁11は前方後円墳。このことから葛城王朝は**弥生後期から古墳時代前期**と考えられる。（鳥越憲三郎「神々と天皇の間」）

**４．実在の論拠**

A 葛城王朝9代の宮跡と陵墓の位置にルールがある。天皇名と宮跡・陵墓の方向

神武1　綏靖２　孝安６　孝元８　は北東・南西方向

安寧３　懿徳４　孝昭５　孝霊７　開化９　は北西・南東方向

B　名神大社ﾐｮｳｼﾞﾝﾀｲｼｬの分布

延喜式(927年)で最高の社格とされる名神大社の数は、後に昇格した神社を除くと

葛城王朝の本拠地であった金剛葛城東麓に5社（御歳・葛木水分・一言主・火雷・高天彦神社）

クーデターで葛城王朝を倒した大和朝廷の本拠地三輪山麓に4社　合計9社

大和の名神大社9社が**金剛葛城東麓と三輪山麓に集中**していることは、この辺りが政治と文化の中心であったことを証明している。

C. 弥志理都比古神社ﾐｼﾘﾂﾋｺｼﾞﾝｼﾞｬ

奈良県磯城郡田原本町多にあるこの神社の祭神は**神武即位後の最初の皇子神八井耳命**ｶﾑﾔｲﾐﾐﾉﾐｺﾄ。日本書紀、古事記の編集功労者で多一族の頭領、太安万侶は、神社の格式を高くしようとして祭神弥志理都比古命をこの神八井耳命に替えて成功した。**当時の大歴史家だけに**、この発想は葛城王朝の実在を証明する。

D.神武天皇即位の地

日本書記巻第三に「畝傍山の東南（西南の誤記）の橿原の地ﾄｺﾛは国の真ん中である。ここに都を作ろうと言われた。」　「東南」とあるので、明治23年に畝傍山の東南麓に橿原神宮が建てられたがそこには橿原の地名はなかった。

本居宣長は「菅笠日記」（1772年）の中で、畝傍山に来て橿原という名は残っていないかと尋ねたら、その村は１里（４ｋｍ）ほど西南の方にある。この近くにはない、と教えられたと書いている。

奈良時代の「東大寺奴婢帳」や続ｼｮｸ日本紀（７９７年）にも御所市の柏原の地名は出ている。

神武が豊作祈願の言挙げ（発声によって言霊の力を発揮）をした記事の中で本馬山、脇上の地名が、また神武の「歌の中に蜻蛉ｱｷﾂが出ているので秋津洲の名あり」と日本書記巻第三に書いてあり、現に秋津ｱｷﾂの地名は即位の地にある。

**５．邪馬台国の卑弥呼との関連**

**魏志倭人伝（**魏書東夷伝倭人の条・280年成立）によると、邪馬台国の卑弥呼が239年に使者に上表文を託して、反対勢力の攻撃から守ってほしいと頼んだ。九州北部の唐津、糸島、福岡、博多などから遠くないと思われる「不弥国から**南へ**水行20日で投馬国（位置不明）、更に水行10日陸行1か月の位置に邪馬台国があり、卑弥呼は死んで**径百余歩の円墳**に埋葬、奴婢百余人が殉葬された」と出ている。この記述について

★日本書記、古事記に邪馬台国、卑弥呼の記述がない。

P２

★漢字が一般化していない時代に、大和の卑弥呼に高度な外交文書を書けるわけがない。

★大和にいて、敵に攻められて魏に救援を求めることは考えられない。

★邪馬台国大和、の説は箸墓古墳を卑弥呼の墓とするが、これは280mの立派な前方後円墳であって円墳ではない。

「本当は謎がない古代史」の中で八幡和郎氏は邪馬台国は北九州の地方政権であり、卑弥呼はささやかな女酋長であって日本を代表する存在ではない、としている。

**６．紀元との関係**

「日本書記巻第三　神武天皇」に「辛酉春正月庚辰朔、天皇即帝位於橿原宮」　辛酉ｶﾉﾄﾄﾘの年の1月1日に、天皇は橿原宮で即位されたとあるが「辛酉」の年とは？

推古33は推古12年に中国の陰陽五行説を取り入れて初めて暦を制定した。陰陽五行説によると60年の21回り目、**1260年目に大変革**が起こる。冠位十二階、十七条の憲法制定、小野妹子を遣隋使として二度も派遣するなど顕著な事績を重ねていた推古9年（601年）こそその年として1260年遡った年(BC660年)を神武即位の年とした。

そのため日本書記の神武の崩御の年齢が127歳、崇神10が120歳、垂仁11が140歳など、不自然な数字が目立つようになった。

**７．日本神話の天孫降臨の雛型は金剛山東麓にある**

　鳥越憲三郎著「神々と天皇の間によると

風の森は水稲栽培発祥の地。古代から鴨族が水稲栽培を営んでいた。その分派が弥生中期から、柳田川が葛城川に合流する辺りで、**事代主神を祀って**稲作で生活していた。

葛城族は金剛東麓標高450m位の高天原で、高皇産霊神を祀って畑作や狩猟で暮らしていた。

葛城族は何度か交渉を重ね、鴨族分派の水田地帯に下りて農耕を始め、この地域の支配権を握った。そして神武天皇が東2kmほどの(日本書記では)「国の真ん中と思われる橿原の地に都を作ろう」と言われ御所市柏原の地で即位された。

この歴史的事実を、神様と神様の話として描いたのが日本神話の国譲りの神話である。高皇産霊神の命令で天にいる神々が次々地上に下って出雲の大国主神と交渉し、最終的には**(大国主神ではなく)事代主神**が国譲りに同意、瓊瓊杵尊が高天原から日向の高千穂の峰に降臨したという筋書である。事代主神は国譲りの神話では大国主神の御子で近鉄御所駅の南にある鴨都波神社の祭神。「次々」→①天穂日命ｱﾒﾉﾎﾉﾋﾉﾐｺﾄ　②その息子　➂天稚彦ｱﾒﾉﾜｶﾋｺ　④経津主神と武甕槌神ﾀｹﾐｶﾂﾞﾁﾉｶﾐ　の順になっていて　④で成功した。

皇位継承や神話伝承を纏めた**帝紀、旧辞**(6世紀成立)、620年に推古33が聖徳太子と蘇我馬子に命じて作らせた**天皇記**(皇位継承)や**国記**(国の歴史全般)が既にあった。645年に蘇我蝦夷が自宅に火を放って自害した時にこれらは一緒に焼かれたが、船恵尺ﾌﾈﾉﾌﾋﾞﾄｴｻｶが火中から(量は不明)持ち出したので、その内容は日本書記**本文**に残っている。本文に続いて「**一書日**」として幾つかの部族に上申させた歴史も一緒に載せている。

**8．日本書記で保証された終戦(1945年)までの「神の御子天皇」の統治権**

「巻第二　神代下」の冒頭で先ず本文があって一書日として第一から八まである。本文と二、四。六では天孫降臨の命令者は高皇産霊神。第一だけが天照大神でここに特異な記事がある。

天照大神が瓊瓊杵尊を日向の高千穂の峰に降臨させる時の詔に

　　日本の国は**我が子孫が君主**となるべき国だ。我が孫よ。これから行って治めなさい。宝祚ｱﾏﾂﾋﾂｷﾞ(天皇の敬語)の栄えるであろうことは天地と共に永久に続き、窮まることはないであろう

詔の中の「是吾子孫可王之地也」ｺﾚｱｶﾞｳﾐﾉｺﾉ　ｷﾐﾀﾙﾍﾞｷｸﾆﾅﾘ　によって天皇家の地位は保証され、代々にわたって統治権を掌握してきた。

９．高天彦神社のご祭神は、実は天孫降臨の指揮者

神武天皇のご先祖　神武に至るまでの6代

高皇産霊神ﾀｶﾐﾑｽﾋﾞﾉｶﾐ(高天彦神社祭神)→天忍穂耳尊ｱﾒﾉｵｼﾎﾐﾐﾉﾐｺﾄ→瓊瓊杵尊ﾆﾆｷﾞﾉﾐｺﾄ

P３

→彦火火出見尊ﾋｺﾎﾎﾃﾞﾐﾉﾐｺﾄ→鵜**玆＋鳥**草葺不合尊ｳｶﾞﾔﾌｷｱｴｽﾞﾉﾐｺﾄ→神武天皇

日本書記巻第二　神代下の本文の冒頭で「天照大神が瓊瓊杵尊直系の祖父であり高皇産霊神は外祖父と記しているが、葦原中国ﾅｶﾂｸﾆ(下界の日本国)平定のため下界の大巳貴神ｵｵﾅﾑﾁﾉ

ｶﾐ(大国主神)と交渉を進めて4度目に成功。瓊瓊杵尊が日向の高千穂の峰に降臨、吾田邑笠狭

碕ｱﾀﾑﾗﾉｶｻｻﾉﾐｻｷで彦火火出見尊を生み、後に亡くなるまでの記事の中で**天照大神の名が出てくるのは冒頭の一度だけ**で降臨の指揮は**全て皇祖高皇産霊神**である。

「天照大神」が加筆されたのは明らかである。

日本書記巻第三は神武が生まれてから亡くなるまで。熊野に上陸し、山を越えて宇陀を平定、大和に入って次々支配下に収めていき、即位して崩御されるまでの過程を記している。

神武が宇陀に着くまでに天照大神は二度神武を助けたことになっているのに、これからの戦いに備えて宇陀で**必勝祈願をしたのは高皇産霊神であって天照大神ではない。**

この二度の天照大神の登場も後の加筆であることは明らか。

１０．天照大神に替えたのは天武40　それは何故？

崇神10は葛城王朝を倒して、三輪山麓で大和朝廷を立ち上げたが、疫病が流行って人民の半ばを超す死者が出たり、「百姓流離。或有背叛。其勢難以徳治」百姓流亡、背く者多く、その勢いは徳を以って治められない状態にあったので**日の神天照大神**を大和朝廷の始祖として祀った。

ここで皇室に二つの始祖が出来た。

天武40は**日の神の直系の子孫であるという権威の下で政治**を行おうと考え、日子思想を大きく打ち出して推古33の史書編纂事業を再燃させた。

ここで天照大神が高皇産霊神に取って代わった。

あくまで憶測ではあるが、663年に白村江の海戦で敗北し、以後唐から攻められる危険があったため、中大兄(後の天智38)は翌年には水城ﾐｽﾞｷを作り防人ｻｷﾓﾘを置いた。

天智の弟天武も、唐対策のためには天照大神を表に打ち出して人心を纏めようと考えたのかも知れない。

**葛城古道　道すがら**

第二十四経塚　　役行者が作った二十八の経塚の一つ

猿目石　　室町時代から地元の信仰の対象になっている。六体の地蔵が刻まれている。

九品寺　　本尊の阿弥陀如来坐像は藤原時代のもの。鎌倉、室町の仏像もある。

千体地蔵　南北朝時代(1333～1392)に北朝に攻められた時、家族や地元の人々が身代わりとして奉納した。南朝兵の慰霊のためのものもある。

城主楢原が南朝方の楠木に味方したことから北朝方に攻められた。

楢原休憩所　この辺りは**葛城襲津彦**(ｶﾂﾗｷﾞｿﾂﾋｺ孝元8の第三子の孫武内宿祢の息子)**の本拠地**

　　仲哀14亡き後、熊襲を支援していた新羅を滅ぼすのに神功皇后に協力した。

襲津彦の娘で仁徳16の皇后**磐之媛**がこの地高宮を詠んだ歌

　　　　　つぎねふ（や）　山背川ﾔﾏｼﾛｶﾞﾜを宮泝ﾉﾎﾞり　わが泝れば

　　　　　青丹ｱｵﾆよし　ならを過ぎ　をだて　倭ﾔﾏﾄを過ぎ

　　　　　わが見がほし国は　箇豆羅紀ｶｽﾞﾗｷ高宮　吾家ﾜｷﾞﾍの辺り

　　紀州に出かけている間に仁徳16が妃として八田若郎女ﾔﾀﾉﾜｶｲﾗﾂﾒを宮中に入れたことを許せず、難波の都に帰らずに山城に向かった。なら山を越える時、別れを惜しんで詠まれた。

一言主神社　一言主神(別名事代主神)を祀る。続日本紀によると、雄略21によって土佐へ流さＰ４

れ、**300年後の764年に称徳48に許されて帰還**してこの神社に祀られた。

高さ20mのイチョウの古木の樹皮が珍しい。葛城襲津彦の強さを彷彿させる歌碑がある。

名柄小学校　校庭に水越峠の水争いの功労者上田角之進の顕彰碑がある。

金剛葛城東麓は地形が急峻で水を溜めにくい。政治的にも文化的にも早くから開けていて水

に強い関心をもっていた。十二か三の角之進は、峠の金剛山側と葛城山側の二か所で、土嚢をわずか積むことによって、自然に任せれば河内へ流れる水を大和の方へ流した。

元禄に入ると河内の方でもこの水が必要になって険悪な雰囲気が目立つようになり、元禄14年（1701年）に河内の農民が堰を壊わしてこの水を奪ったことで大きな争いになった。

双方が京都所司代へ訴え出て7か月後に大和吐田郷勝訴の判決が出た。**先に水越峠の水を使っていた**ことが判決理由であって**上田角之進の功績が高く評価**された。

田植え歌に　　　長柄角之進十二や三で　水を大和へみな下す

　　　　　　　　　　　　　　　水が大和へ皆下るのも

橋本院（宝宥山高天寺橋本院）

葛城修験道の発展に伴い、鎌倉時代には高天寺は金剛七坊の一つとして高天千軒の名があるほどに栄えていた。高天寺で今残っているのは橋本院だけ。

　754年に唐の高僧**鑑真和上**が来朝、孝謙46によって高天寺の住職に任命された。

高天彦神社　　祭神は天孫降臨神話で降臨を指揮した高皇産霊神

鶯宿梅　　　　初春のあしたごとには来れども(**初陽毎朝来**)

　　　　　　　　　あわでぞ帰る　元のすみかへ

　　鑑真が弟子の死を悲しんでいた。同情した鶯が梅の木にとまり、この歌を歌って慰めた。

　　この話は鎌倉時代の「**曾我物語**」に出ている。

　　また三条公条は1553年に「吉野詣紀」に

　　　　　　　高天寺に至りぬ。初陽毎朝来の梅の木、近き頃の風におれたるよしを

　　　　　　　申して、一丈ばかりの数囲枯朽したるあり。**かたはらに小祠**あり。

　　貝原益軒も「南遊紀行」に

　　　　　　　大なる社あり、高天寺あり、俗に所謂鶯の初陽毎朝来と囀りし梅ありし所なり

高鴨神社　　祭神は**阿治須岐詫彦根神**ｱｼﾞｽｷﾀｶﾋｺﾈｶﾐ（大国主神の御子）

この辺りは古くから鴨族がこの神様を中心に農耕を営んでいた。

一言主神が764年に称徳48に許されて帰還した時にこの神社が作られここで祀られたとも。

5世紀の高級道路遺跡　　**5世紀**に作られた道路が発掘された。路面に水が溜まらないように最深部で水を谷に流す排水処理が施されていた。

風の森神社　高野山から吹き降ろす強い西南の風から五穀の実りを守ってもらえるように、**風の神様支那都比古神**ｼﾅﾂﾋｺﾉｶﾐを祀っている。

Ｐ５

**役行者ってどんな人？**

1. **役行者の名前は？生存期間は？**

797年成立の勅撰歴史書続日本紀には**役君小角**ｴﾝﾉｷﾐｵﾂﾞﾇ。「役」から、宮殿や陵墓の建設などをする役民ｴﾀﾞﾁﾉﾀﾐを司ったり、租税の取り立てをしていたことがわかる。

日本霊異記（822年）には**役優婆塞**ｴﾝﾉｳﾊﾞｿｸ、**賀茂役公**ｶﾓﾉｴﾉｷﾐ

「役公」は賜る称号であり天皇家と何らかの繋がりがあったと考えられる。

「優婆塞」とは仏教信者で、お寺で修行して僧侶と同じような力量のある人。身分が高い人は僧侶になれるが、役公程度では政府公認の僧侶にはなれなかった。

**役行者**は平安時代に入ってからの呼び名。

634年御所市茅原で生まれ没年は701年とも703年とも言われる。

推古33(592年～)から元明43の平城京奠都(710)までの11代が飛鳥時代(但し538年仏教伝来の年からとの説もある)。舒明34から文武42までの9代が生存期間なので**飛鳥時代**をほぼ生き抜いたと言える。

10歳の時元興寺ｶﾞﾝｺｳｼﾞ（当時の名前は飛鳥寺または法興寺　都が平城に移って飛鳥から今の奈良市中院町に移され、改名された）に入り,12歳で慧濯ｴｶﾝ僧正からどんな悩み、恐怖、災難、長雨、干ばつからも解放してくれ、病気や蛇のも治してくれ、精進すれば空をも飛べるようになるという有難いお経「孔雀明王呪経を授けられた。**呪術者小角**の誕生である。

**２．その頃世間の人の暮らしは？**

**宮殿や陵墓の建設、乙巳の変、対外関係**が生活に重くのしかかっていた。

羽曳野市役所世界文化遺産登録推進本部の講座と資料によると応神15陵425mは全国4747基中2位　143㎥の盛り土のために大林組の試算では濠を掘ったり運んだり積み上げるのに143万人　これを含めて築造全体に680万人　**働く者は惨め**。下記の築造の労力が想像できる。

652年に孝徳37が難波長柄豊碕宮(大阪城の南の方)

斉明37は飛鳥板葺宮で即位して**宮殿を三度も**作った。瓦葺の小墾田宮ｵﾊﾘﾀﾞﾉﾐﾔを建てたものの失敗。国民は役民ｴﾀﾞﾁﾉﾀﾐとして宮殿の造営や陵墓の建設に駆り出された。

唐新羅に敗れた百済が復興運動を始めたが、それに協力して日本が**唐、新羅を相手**に戦うことになり、663年には1000隻が**白村江**に乗り入れ、400隻が炎上して大敗、百済の亡命者を連れて帰ってきた。戦費も膨大、亡命してきた百済人の厚遇の費用、**唐が攻めて来ることを恐れて**水城を構築、防人を置いた。その費用も大きく、過酷な重税は国民を苦しめた。

645年には乙巳の変。蘇我入鹿が殺され父蝦夷は家に火を放って自殺し、蘇我家は亡びた。

役行者周辺は蘇我の領地になっていた。**領主が滅びると領地の住民は奴隷同様**、惨めなものになり、難波宮の建設に引っ張り出されて使い捨てであった。

**租税の取り立ては厳しく**、箕面、生駒、金剛、葛城。大峰、熊野の山に亡命した。

**３．役行者と天皇との関わり合い**

舒明34の御胤ﾐﾀﾈとの説がある。

幼少の頃から毎晩金剛葛城を登って夜明けに帰宅、他にも箕面、大峰を歩き回り、32歳の時、自作の木像を寝かせて自分に見せかけ、反対する母を騙して家を脱出、以後帰宅はしなかった。

この話を聞いた**天智**38は母白専女ｼﾗﾄｳﾒに寺を建てさせ金剛寿院**吉祥草寺**の名を授けた。

小角は36歳の時、白い光を放つ石を見付けた。掘り出してみると弥勒三尊の石像であった。

この話を聞いた**天智**の勅願によってこの石像を祀り、名も天智から賜って**石光寺**を開山した。

次に天智の弟**天武**40との関係。大海人皇子(後の天武)は壬申の乱を戦った時に数百人の協力を要請、また山の修行で得た鉄等の鉱物資源の知識技術を提供させ、**戦力に貢献**させた。

他にも。**天武**は禅林寺(後に改名して**當麻寺**)を建てる時、役行者に頼んで**土地を提供**させた。

P6

次に**持統**41。持統は鸕野讃良ｳﾉｻﾗｻ時代、文武42時代含めて**役行者に33回吉野で**会ってい

る。鉱物資源、製造方法、辰砂、薬草についての知識吸収のためである。

文武3年(699年)を最後に、用がなくなった役行者と会うのを止め、追放にかかった。

「放置しておくと帝位を覆し、国を傾けてしまいます。」こんな讒言もあった。**讒言したのは**

日本霊異記(822年)、今昔物語集(平安時代)、役君形生記ｷﾞｮｳｼｮｳｷ(1684年)、役行者絵巻は、岩橋山から吉野へ橋を架けられなかった**一言主神**。

役行者御伝記ｺﾞﾃﾞﾝｷ図絵(1850年)は小角を師とする**韓国連広足**ｶﾗｸﾆﾉﾑﾗｼﾞﾋﾛﾀﾘとしていて、

続日本紀(797年)にも文章の流れから韓国連広足が讒言したと取れそうな表現がある。

役行者は遠流ｵﾝﾙの刑を受け、伊豆の大島へ流された。

大島にいても夜中に抜け出て富士山、箱根、天城、江の島などへ飛び回ったのでいよいよ処刑。

その時富慈(富士)の明神のお告げが出た。内容を調べると「この人は大賢聖だ。死罪を免じて都へ迎えなさい」。**文武は役行者を無罪**にして都へ迎えた。

以上のように、**役行者と天皇家との関係**は深かった。

**４．役行者の権威**

古来葛城山を代表する名所は「岩橋」、今の名で岩橋山の久米の岩橋。河内名所図会(1801年)は、役行者が金剛葛城東麓を代表する権威のある神様一言主神にここから吉野へ橋を架けろと命じたができなかったので「呪縛して深谷に押し置き給へり」としている。

**一言主神にこれだけのことができた**のだからその権威は理解できる。

**５．役行者の功績**

役行者が山に入ったのは山へ亡命している人を含めて苦しい生活を強いられる人々に手を差し伸べ、迷いから救い、**仏道へ導こうという信念を一生貫いた**。

死んで仏様に極楽へ連れていってもらえるのは貴族か豪族くらいのもので庶民には見向きもしない。そんな中、**仏様のご慈悲を庶民にも**と考えて友ヶ島から紀泉、金剛の山並み、大和側の亀の瀬までの**二十八里に法華経二十八品を埋納**した。

この経塚を訪ねてお参りする人が多くなり、平安末期か鎌倉初期に葛城修験道の最初のガイドブック「諸山縁起」が作られ、鎌倉時代に最も栄えた。役行者についての文献も「役行者本記」、「役行者顛末秘蔵記」など奈良時代のものや室町時代、江戸時代にかけても多い。

金剛山頂で役行者が修行していたところに**法起菩薩が出現し、大勢の菩薩を前に説法**していたので**そこに法起菩薩をお祀り**した。後に(736年唐の僧が伝えた華厳経の諸菩薩住処品に

　　　金剛山で法起菩薩が眷属，諸菩薩衆千二百人に仏法を説法する。

と出ていることがわかり、それなら葛城山と呼ばれていたこの山こそ「**金剛山**」。祀った場所に「**金剛山寺**」の名が定着し、**葛城修験道の中心的存在**になった。

「仏法を説法」の中で、説法が「転」、仏法が「法輪」。**転法輪寺の名の由来**。(「金剛山記」)

役行者生存中は追い詰められた庶民に救いの手を差し伸べた。後世に対しては人々を山に導き、山を歩く喜びを教え、幸せにした。

宗教登山と言うか、外国とは一味違った登山意識が育ったのも、役行者の尊い置き土産であろう。

文武42は役行者を都へ迎えたが、私の望みは**悩み苦しんでいる人を助け、悟りの世界へ導く**ことだと言って断った。

没年は701年とも703年とも。場所も箕面であったり大峰であったり。

母を鉄の鉢に座らせ、自分は草の座に乗って唐へ飛び去ったとか韓国で見かけた人がいるとか。

死ぬ間際に弟子達を集めて、すべての人達を苦悩から、呪縛から解放してあげなさい、との言葉を残したとも。文献によって曖昧模糊としている。

P7

**飛鳥時代と役行者**

34～42代の天皇の御代に生存

飛鳥時代は33～43代(但し538年仏教伝来の年からとの説もある)

推古33　592～628暦を創設　冠位十二階　十七条の憲法　法隆寺の建立

推古28年聖徳太子、蘇我馬子に天皇記ｽﾒﾗﾐｺﾄﾉｷ、国記ｸﾆﾂﾌﾐ編集を命じた。

100年後に日本書紀完成

舒明34　629～641役行者が舒明の御胤ﾐﾀﾈとの説がある

皇極35　642～645飛鳥板葺宮　乙巳の変で退陣

孝徳36　645～654長柄豊碕宮　飛鳥に留守官ﾙｽﾉﾂｶｻ

斉明37　655～661板葺宮で即位　瓦葺の小墾田宮ｵﾊﾘﾔﾉﾐﾔ失敗　飛鳥岡本宮完成したが放火

両槻宮ﾌﾀﾂｷﾉﾐﾔ　石垣に10万人掛けたが完成せず

天智38　668～697中大兄時代663年に白村江の海戦で大敗　翌年水城構築　防人を置く

弘文３９　671～672

天武40　673～686大海人皇子　日本書紀巻二十八天武上「**大海人皇子鴨君蝦夷に数百人を率いて石手道（竹内峠？）守らせた**」壬申の乱で弘文39を倒して即位

聖徳太子の弟麿子皇子が建てた河内の山田の万法蔵院を今の當麻寺の位置に移して禅林寺とし、後に當麻寺と改名

持統41　686～697鸕野讃良、文武時代を含めて役行者に吉野で33回会っている。用事がなくなると、そして**一言主神か韓国連広足の讒言**があって文武時代に**遠流の刑**にしょした

文武42　697～707処刑直前富慈(富士)の明神のお告げがあり役行者を**都へ迎えた**

元明43　707～715　710年平城京へ移した　712年古事記、　720年日本書紀完成

ここから奈良時代

葛城修験道の最初のガイドブックは「諸山縁起」　平安末期か鎌倉初期の作品

役行者については続日本紀、日本霊異記、扶桑略記、今昔物語集、本朝神仙伝など　平安時代

役行者本記、役君形生記、役君徴業録、役行者霊験記、役行者顛末秘蔵記、役行者御伝記図絵等　室町時代、江戸時代

近年のものでは、これらの文献を比較対象しながら解説する志村有弘の「超人役行者小角」のほか銭谷武平の「役行者伝の謎」。黒須紀一郎の「役行者」、また黒岩重吾、藤巻一保の本も読ませてもらった。

法華経二十八品を葛城の山中に分散して埋納したことで、信仰の名の下で山を登ることの利益と喜びを惜しげもなく万人に分け与え、点として発生した神奈備信仰を線でつなぎ、一つながりの行所として発展させた（五来思「近畿霊山と修験道」）功績は大きい。

2016年3月21日　　　　根来春樹

P8